大浜訪問同行記

大浜収容所のあった山陽小野田市を訪問したのは、元捕虜のチャールズ・エドワーズさんとアディ・ロックリフさん、付添家族のキャロリン・アーチボルドさん(孫娘)とキャサリン・タイさん(娘)。それに外務省の原田容子さん、通訳ガイドの伊藤香子さん、看護師の松近真紀さん、POW 研究会の笹本妙子の4人が同行しました。山陽小野田市役所は、これまでも捕虜関係者が訪問するたびに全面的に協力して下さっていましたが、今回も素晴らしい対応をして下さいました。

10月4日(金)

一行は 10:15 に羽田空港を出発、11:55 に山口宇部空港に到着。待機していたジャンボタクシーに乗って宇部市内を抜け、山陽小野田市に入ると、市長表敬まで少し時間があったので、「きららビーチ」に立ち寄りました。眼前には真っ青な空と海が広がり、背後には収容所のあった丘が見えます。エドワーズさんはこの浜辺は記憶がないとのことでしたが、ロックリフさんはここに遊びに来たことがあると語っていました。

13:30 山陽小野田市役所へ。市民生活部の増富久 之さんと安重賢治さんが出迎え、市長室に案内され ました。人権派の裁判官、弁護士だったという白井 博文市長は、「自分の職業経験から、加害者はすぐ 忘れるが、被害者はいつまでも忘れないということ を実感している」と語り、お二人の戦中の苦難に対 して心からのお詫びの言葉を述べられました。ロッ クリフさんは「大浜では苦労もあったけれど、地元 の人たちと良い関係を持つことができた」と語り、 エドワーズさんは「私は炭鉱内で働くことはなく、 パン職人として働いた。これは収容所で2番目に良



い仕事だった」と語り、広島原爆の閃光ときのこ雲を見た話をされました。市長からお二人に山陽小野 田市産のガラス工芸品がプレゼントされました。





次に歴史資料館を訪問。ちょうど炭鉱展が行われていて、当時の大浜 炭鉱の写真も展示されていましたが、海側から撮った写真だったので、 「我々は陸側からしか見ていなかったからねえ」と、なじみがない様子。 展示物も戦後のものが多く、お二人の記憶を呼び覚ますものはなかった ようです。

しかし、ロックリフさんが思いがけない写真を持参していました。「大 濱炭鑛」という文字と炭鉱マークの入った湯飲みの写真です。終戦後、 収容所?に転がっていたのを拾って持ち帰ったのだそうですが、大事に 保管されていたようで、70年前のものとは思えないほどピカピカに光 っています。

一方エドワーズさんは、捕虜時代の手記や写真、スケッチなどを収め

た資料ファイルを、資料館スタッフや取材記者 たちに披露しました。大浜収容所の見取図、入 所時の彼の写真、終戦時の捕虜たちの写真など 貴重なものばかりです。この資料ファイルは、 資料館でコピーされた後、P研に寄付していた だきました。この中に愛らしい日本女性の写真 が1枚入っていました。これは彼がクアラルン プールの収容所にいたとき、ペンが欲しくて、 日本兵が脱いだ上着のポケットから失敬した 時に挟まっていたものだそうで、「恋人の写真



だろうと思ったが、返すに返せず、オーストラリアまで持ち帰った。この日本兵か写真の女性に返したい」とおっしゃるのですが、実はこれ、若かりし頃の高峰秀子のブロマイドだったのです。裏書きを見ると、誰かからの慰問品のようでしたが、返そうにも何の手がかりもありません。それにしても、捕虜が日本女優のブロマイドを持っていたなんて、何か微笑ましい話です。

続いて本山地区へ。実は大浜収容所跡周辺は民家がなく、当時のことを語れる人がいないため、市役所の安重さんが、同じ市内にあった本山収容所の近隣住民との交流をアレンジして下さったのです。以前、オーストラリアの大浜収容所関係者が来訪したときも、本山の人々に会わせたらとても喜ばれたからとのことでした。



当時子どもだった人々が 7~8 人、収容所近くの民家に集まって、当時の思い出話を語って下さいました。戦後パラシュートで投下された救援物資を拾いに行ったこと、家で飼っている鶏と投下物資を交換したこと、塀のすき間から卵を差し入れるとお返しにチョコレートがもらえたこと、パラシュート生地で洋服を作ってもらったこと……等々。収容所は別でも、エドワーズさんもロックリフさんも共通体験があり、終戦後住民と交流できたことは楽しい思い出だったようで、話が大いに弾みました。特に、本

山に遊びに来たことがあるというロックリフさんは「今日のハイライトだ!」と大層喜んでおられました。

1 つだけ気になったのは、エドワーズさんが広島原爆の閃光を見たと語ったのに対し、住民の皆さんの誰も見たという人がいなかったことです。安重さんも「私も当時の住民にいろいろ訊いてみましたが、この町で原爆の閃光を見たという人にまだ出会ったことがないんですよ」と言います。この件に関しては、後日 P 研 M L で菅原さんが科学的データを用いて「山陽小野田市から広島原爆の閃光が見える可能性はかなり低い」と書いていました。しかし、エドワーズさんの手記を読むと、炊事場の窓やドアから見たこともないような銀白色の閃光が差し込み、仲間のケリーの顔や体を照らしたこと、最初自分たちが爆撃を受けたのではないかと思ったが、音も痛みも出血もないので、自分があの世にいるのではないかと思ったこと、後で時間を確かめたら広島に原爆が投下された時と同じとわかったこと、などがリア

ルに書かれており、とても作り話とは思えません。この件は、他の資料やデータも集めてさらに検討する必要がありそうです。

10月5日(土)

この日は収容所跡地を訪問しました。現在、 跡地には小さな社宅が建っている他、ほとんど 空き地になっています。エドワーズさんは、収 容所の見取図と照合しながら、この辺りに豪捕 虜の宿舎があったとか、炊事場があったとかよ く覚えておられましたが、ロックリフさんは周 囲の風景が大分変わって、よくわからない様子。

収容所の警戒員だった佐藤市男さん (93歳) が来て下さり、お二人と握手を交わしました。 お互いに顔も名前も記憶がないとのことでしたが、エドワーズさんがクマサン、フジノサン、



コタケハラサン、ナガシマサンなどと日本人職員の名前を挙げると、佐藤さんは「ああ、その人はこれ これこういう人で……」と説明します。シャイな方のようで、彼らとはなかなか話をしないのですが、 戦犯になった人のことや、自分が親切にしてあげた捕虜が投下物資を家まで持ってきてくれたことなど を私に話して下さいました。

その後、市内や瀬戸内海を眺望できる竜王山へ。海の向こうには、南方からの捕虜輸送船が到着した 門司の街が見えます。大浜の捕虜たちは門司から小舟で大浜にやってきたそうですが、その距離感がよ くわかりました。

郊外のレストランで昼食を取った後、安重さんの知り合いの造り酒屋を見学し、15:05 新山口発の新幹線に乗車。途中広島でホワイトさんの一行と合流し、京都に向かいました。

メディアは、NHK、読売新聞、山口新聞、宇部日報が取材に来ていました。その日の読売新聞夕刊に「豪元捕虜 68 年ぶり収容所跡」という見出しで資料に見入るロックリフさんとエドワーズさんの写真付きの記事が掲載されました。また同日山口新聞、少し遅れて 10 月 8 日に宇部日報にもそれぞれ記事が掲載されました。この他、P研メンバーで朝日新聞福岡報道センター勤務の岡田玄さんが、「消える収容所跡地」という企画記事のため取材に来ました。

なお、エドワーズさんの孫娘、キャロリンさんが日本滞在中の記録を毎日ブログに載せています。彼 女やエドワーズさんがこの旅をどう感じたか、よくわかりますのでぜひご覧下さい。

http://ubeauties.wordpress.com/2013/10/01/day-one-a-royal-welcome/

また 11 月 11 日には、エドワーズさんにスポットを当てたニュースがオーストラリアの国営放送 ABC で放送され、以下のサイトで見られるようになりました。大浜訪問や東京での交流会の様子も紹介され、エドワーズさんと親交のある P研の佐久間美羊さんがインタビューに応じています。

http://www.abc.net.au/news/2013-11-11/an-former-australian-pow-returns-to-hiroshima-prison-camp/5082186

(笹本妙子)